

キーワード 国文学 真淵 宇万伎 『にひまなび』 本の又がし

一

賀茂真淵は江戸中期、国文学の領袖として、学問研究に身体を削り自己の学問を形成していく。自己の学問を研磨し伝播する手段として、書簡を多用する。弟子を育成する手段として、一例を挙げれば学問の問い、答えのやりとりのために、本居宣長とは一度会っただけであったが、あとは詳しい手紙のやりとりが行われたことは臆炙されたことである。真淵は学問の伝播のために労を惜しまず、支持してくれる人々や弟子に長文の書簡を送附している。江戸時代の手段として最大限に書簡を有効利用した。

書簡集には真淵の出自にかかわる岡部家、植田家、梅谷家といった親族を含む関係の人々、真淵を顕彰する人々や、弟子の中でも本居宣長の系譜により伝承されてきた人々、内山真龍や栗田土満への書簡が目につく。

真淵の筆まめぶりから推察するに、大部の書簡が伝承されず、散逸の運命を辿ったと推測されるものは、江戸の火災で灰燼にふしたものも含め多かったであろう。

一方、宣長の場合、松阪において子々孫々、諸資料が散逸せぬようにとの家訓があったのではないかと思われるほどである。公家の冷泉家の御蔵のごとき資料伝承を、町人家において実践してきた稀有な家である。京都、大坂や江戸のごとき火事が頻発しなかったことも幸いしている。

真淵の著述、書簡によって真淵の学問の目指した方向が見えてくる。弟子たちとわが国の古典作品の会読を行い、それを著述していく。そういった際に真淵は弟子に指示を与え、出版の尽力を依頼するこまめな書簡を送附する。

真淵真筆の新資料が「大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館」(以下、国文学研究資料館と称す)に存する。真淵の書簡集『賀茂真淵全集 第二十三卷』(續群書類従完成會刊行)には入っていない、新資料と認定し得る書簡である。

従前の真淵書簡には弟子を中心として、人と人をつなぎ、学問を進捗させることを促すものや、あるいは厳しく学問の在り方を説く書簡などが顕著で、真淵学に通底するものであった。

しかし、今回わたくしが目にして驚くべき内容の書簡が国文学研究資料館に収められていた。

東京都品川区戸越から立川市に二〇〇八年(平成二〇)度の初春移転、四月から立川市在の国文学研究資料館としての出発と重なる。遡れば『国文学研究資料館報』第五三号(平成一一年九月刊)の中に、平成九年東京古典会で購入されていたことを知る(鈴木淳、国文学研究資料館)。

桐箱に「和学者書簡集」中の一軸(「拾二」と朱書)には、「加茂真淵、本居宣長、平田篤胤、加藤千蔭、村田春海、楫取魚彦、石塚龍鷹、荷田蒼生子、上田眞幸、屋代弘賢」、もう一軸(「拾四」と朱書)には「加茂季鷹、僧似雲、密庵僧慈、滋野井公麗、橘守部、加納諸平、村田泰足、内藤廣前、一柳千古、近藤光輔、佐々木春夫」の書簡が納まる。

拙稿で扱う国文学研究資料館の真淵書簡は、賀茂真淵自筆でありこれは真淵の晩年、自筆の書簡などに見られる特徴、全体に縦の行の各行が、右から左の方向へ斜めに流れて書かれる傾向にある。おそらく目の疾患からくるものであろうが、その疾患は不明である。

従前、真淵が弟子に宛てた書簡には、自己の著作について、高齢に鞭打ち切磋琢磨する様子や、目もうちくなり「学問がはかゆかぬ」と研究の進捗を歎く真淵の姿が見える。

ところが、今回の書簡の特徴は、弟子の加藤宇万伎を怒る、憤怒の相の真淵が窺える。しかし、女性の弟子青木菅根に宛ててしたためており、愛弟子の宇万伎に直接宛てたものではない。宇万伎は直接、真淵から苦情、怒りの書簡を受け取っていないようである。また、なんらかの書状が現存していれば詳細が明らかになるが、今のところ該当の書簡に関わるものの出現はなく残念ながらわからない。

自己の著作が勝手に本人に許可なくやりとりされ、〈また貸し〉が行われていることへの、真淵の怒りを顕わにした書簡である。宇万伎が貸し与えた弟子は自分の知らない人物という。真淵書簡にこれまで弟子を学問上のことで叱責することがあるし、さまざまな怒りを手紙にしたためることはあっても、資料の〈また貸し〉に対して、本気で怒っている書簡は初めてではなからうか。それには真淵なりの意味があった。

語気強い発言のあと、真淵は自分にことわってから使用することと、みずから勉強するためであれば著書を貸してよいと、学者らしい意見を附け加えているのである。真淵の率直さや、寛容と人のよさを感じさせる。真淵と弟子間の緊張感の漂う学問をめぐるやりとりを垣間見せる。

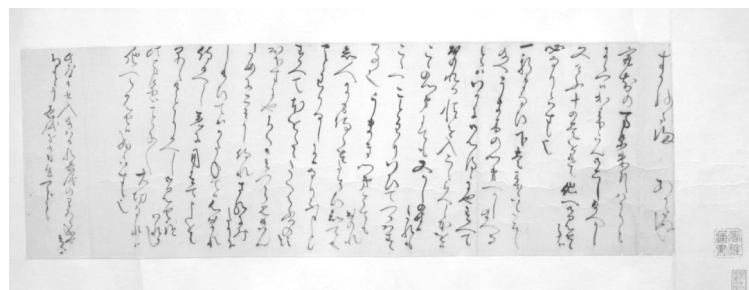
真淵が渾身を込めた研究結果であること、ことに新研究の『万葉考』の扱いについてかたく流出を避けるべく、注意を与えたものである。資料の扱いとして、真淵のいうことはもっともなことで、なぜ真淵が記したような状況になったのか、宇万伎からの情報はこれに関しても見当たらず、具体的な事情は定かではない。真淵は学問の進捗に関して積極的に人々との交流を結び、領袖として地位を確立した人物である。国学者としてその姿勢を貫いた卓越した人物である。が、その琴線に触れた宇万伎の負の行為とはどのようなものだったのだろうか。興味深い書簡であるといえる。

二

ここに、国文学研究資料館蔵の真淵書簡を紹介する。

「賀茂真淵書簡 青木菅根宛」年次月日不明
（国文学研究資料館蔵 卷子本二軸『和学者書簡集』）

請求番号「ヨ一―二八―一（二）」



書簡

「すがねさま

（糊付けあり）

最前の万葉朱引ばかりと

に候へば出来候はん。御こし給へかし。

又けふ十の巻を遣候。他へ御見せ候

事は

必なり候はず候也。

一 新まなび下巻来候はゞ御こし

あがたぬし」（端裏書）

給へ。うまきの門弟へかし給へる
とは、いかに御心得候にや。すべて
おのれが情を入、こしらへし本をば
ここの門弟にても、又がしの時は

たれも

こゝへ、ことわりいひてつかはす
事也。うまき門弟とても

おのれ

知人にも侍らず。たとひ知ても
ことわりなしにはなり不申候。
すべて本をたゞたくはふるのみ

と

おぼすにや。よく御みづから見給はん
ためにこそ、かし侍れ。さ様にみだりに
し給ひては、かさねては心おかれ
侍るべし。急に用有て申進候。

早々御とりかへし御見せ給われかし
此万葉はことごとく大切なれば
他へ御見せは御成候はず候也。

此後の書入給はる新表紙のわろく成也。青色
ちようとう表紙を御付置可被下候。

上記、真淵書簡の五行目に『新まなび』下巻の完成が記されている。ちなみに、真淵は後進に向け『うひまなび』を明和二年（一七六五）の春に著し、その後ただちに同年秋に『邇飛麻那微』を著述している。『にひ学び』の成立は「明和二年七月十六日にしるしぬ 賀茂真淵」と本文末に真淵の手で著されている。

その『新まなび』において、真淵は加藤宇万伎が宇万伎の門弟に断りなしに、著述を貸して与えていることを遺憾とし怒っているのである。この門弟の名前

賀茂真淵の国学と著作観

は記されていない。原本は真淵の真筆であり、墨つぎによりひときわ墨筆濃く「又がしの時は」（本文九行目）が強調された如くみえる。文面に、真淵の〈又がし〉への批判が顕わに吐露されている。余談ながら、〈又がし〉という言葉が江戸時代、普通に使用されていたことを知る興味深い資料でもある。

『にひ学び』の成立は「明和二年七月十六日にしるしぬ 賀茂真淵」と本文末に記されている。

真淵が力を割いてやっと仕上げた『万葉考』巻十も貸すべからずという。真淵が情をこめて渾身、尽力して注釈をしたものであることがこの手紙からわかる。のち、『万葉考』巻十は真淵の意識とは異なった粕諸成等の増補訂正を経て、通行の巻十五に当てられることになる。原本は真淵が尽力して注釈を施していたのである。

真淵書簡の宛先は「すがね」とある。藤原菅根といい武士青木朝恒の妻である。歌人として活躍し、国学に身を入れて真淵の『万葉集』会読にも出席していた。生没年は、下記に示す『あかたぬすさみくさ』奥書にある「寛政八年（一七九六）は七十一歳」で存命であったことを知る。没年は不明。従前の不明をぬりかえ、生年は逆算して享保十年（一七二五）となる。江戸人である。真淵の弟子として、国学研究を宇万伎等とともになす。

別の一本、真淵から青木すがね宛書簡があるが、これも年代不明である。以下に、真淵と弟子の学問交流の参考として掲げよう。

御風けはよろしきや、こゝにも此てしにくしてなん、さは此哥集の上巻に、おのれか序、又哥に朱てん傍書なとせし本御もち候は、是に御書入たのみ入候、遠き國へやらんとするに、こゝになければ也、もし風気のなごりにて筆取給ひかたくは、此本直に御かへし候へ、外へ申すへし、必御心おかで聞え給へ、くるしからず候也、御快は此一卷はやくたのみ入候也、いそく事に侍り、

二十八日

すかね君

あかたぬし

真淵はまことに短い書簡ながら、みずから序をしたため、和歌の指導の朱点や傍書の書入れなど、夥しい草稿本のやりとりを真淵の常ながら窺わせる書簡である。真淵は本の返却、催促や早急の依頼など、仕事を早くすることに終始する。遠い国にやろうとするが、ここに無いという状況をかんがみても、真淵の本は著述されると、遠近にかかわらず自分の手元を離れて弟子たちの手に移るといった夥しいやり取りの状況が窺える。

菅根は真淵が没した後も、諸成らによる『万葉考』の増補校訂などに臨席し関わっていた女性である。

『あかたぬすさみくさ』を粕諸成（毛呂成）が七十四歳の時に記したとあり、奥書に藤原すがね七十一歳で寛政八年（一七九六）五月二十七日から始めて六月二日に書写終了の旨記されている（以下、専門以外の方が目を通される場合、原資料の逐次収集は時間的にも難渋を極めるのではないかと想定し、煩雑を承知で全文に近い資料紹介を試みたい）。

あかたぬの門に遊びいと多かりしかまたしきほとに身まかりあるはことわりのよはひにして過にしもありて今ふたりみたりのこれりし人々はいとうとうとし諸成大人はあかたぬの門つ人にしもあらねと大君ゆ仰ことにて田安中納言の君に奉らし同殿にてをちのかみに立てつかうまつりたまひひめもす夜すから御かたはらにて物まなひ給ひかの君と御もろ心にをちをしぬひしにおのれはやくよりなれ聞えまつししかはをちの身まかれ後は御かはりにとたのみつるにいとねもころにはらからの如おほして物をしへ道引給ひつゝかゝるふみなとおかいつめ給ひ見よとてもおはせいみ心さしの深きを思ふにもかたみに老行かいとわひしくて

世の中に老すしなすのくすりもかとも在つゝことゝはましを諸ともに見しよの月をおもへればあやしく袖に影そやとれるつこもりにし後はやみにのみまとへるを道ひかれむと頼おもふ心や空にかよひけむめてたき言にことの葉そへて見せ給ふにおほろにもこのころことはひろひつゝ見よとて月のかけそさしぬる

寛政八のとし五つき二十まり七かの日にはしめてみな月二日の日に寫はてぬ
七十まりの一のよはひ 藤原すかね

菅根自身は早い段階から真淵に学んでいた、とみずから記す。が、諸成は縣居門でない。田安宗武家臣として真淵学に親しんできた人であった。菅根と諸成は真淵が卒した後も真淵学のために尽力するのである。

菅根のことは、『万葉考』巻七序に「真淵かともとせし藤原菅根にとひ、同じともなるもとの藤原宇万伎がかきつけおけるふみらこひ得て、これをたつきに生したてなめとおもひなりぬ」と記されている（天明五年三月十九日粕諸成）。田安宗武側近としての諸成であり、その交流を知る。諸成は真淵の原注釈を独自に変更していった。研究するに際し真淵と諸成の真意、差異がどこに存するかといった点などを明確に把握し注意しなければならない。

真淵は画期的な『万葉考』研究にふさわしい「縣主」という号を書肆や弟子に示していくことと連動しているようである。

真淵の「縣主」と署名された書簡を洗い出しておく。真淵が「あがたぬし（縣主）」「あがたい（縣居）」の署名を使用している書簡を『賀茂真淵全集 第二十三卷』（續群書類従完成會）から拾い記す。これに国文学研究資料館蔵の賀茂真淵のすがね宛書簡も加わることになる。

縣居書簡續編（岡部讓編）

「縣主」	五六	明和元年一〇月二四日	内山真龍宛書簡
「あかたぬし」	五七	明和元年一二月二二日	森繁子宛書簡
「縣主」	五九	明和二年三月一五日	本居宣長宛書簡
「縣主」	六〇	明和二年六月二二日	内山真龍宛書簡
「あかた居」	六二	明和三年八月二六日	内山真龍宛書簡
「縣主」	八六	明和六年二月二〇日	内山真龍宛書簡
「縣主」	九〇	明和六年九月二三日	栗田土満宛書簡
「かもの縣主」	九三	年代不明（明和三年カ）	二月五日 植田七三郎宛書簡
「あかたぬし」	一一七	年代不明某月某日	眞田ふち子宛書簡
「あかたぬし」	一二九	年代不明某月某日	森繁子宛書簡
縣居書簡補遺			
「あかたぬし」	一四	寶曆八年一二月二二日	梅谷市左衛門宛書簡
「あかたぬし」	一七	寶曆九年某月某日	外山女宛書簡

「あかたぬし」 四一 年代不明 青木すかね宛書簡
「あかたぬし」 五一 年代不明 御かたゝの君へ宛書簡

「縣主」という呼称の意味づけや理由等について、真淵みずから規定している。次の書簡は宝暦七年九月八日加藤又左衛門（筆者注、加藤枝直）宛である。真淵が力を入れた手紙ゆえ長いが引用する。

又左衛門様

衛士

昨日者御報御清書御示等辱拝見、然處田安にて心安き學生の人々、其外へも為見候處、拙名を御記被成候事、御子弟或は御家來筋にも聞え可申様に皆々申候、拙者は不苦と奉存候事、最前も得貴意候通に御座候處、右之通に候へは、将来の評判も如何に御座候まゝ、御改被下候様に仕度奉存候、若御同心に御座候は、賀茂真淵をは御止被成、吾縣主など被成候か、又は賀茂翁とも被成可被下候（哉）、縣主は拙姓二候間、去年以来より拙者別名の様に諸方にても書音に記候人有之候、書林の礼にも縣主と記申候、是等は自分の事に候へは、申上候も非礼に可思候へ共、無是非御相談仕候事に御座候、又翁は万葉の家持の家臣が鷹を失候時の歌にもをちがとよみ、又山田翁ともみられは、決て御あかめ候事には無御座候、縣主はかはねに候へとも、賀茂縣主といふ時は少しあかめ候様に成可申哉に候、○姓のみいふは物語などに、わか子をも家礼をもさしては、姓のみ申せし子と多有之候、其中にも眞人・朝臣などは高姓なれば、今にてはいかゝ候はんや、縣主・稲置などの類は別て不苦事と相聞え候、其上右申上候通、拙之号の様にも存候ての事に候へは也、猶思召如何候半哉と奉存候、以上、

九月八日

又左衛門様

衛士

回呈

即刻御歸被成候由にて、早速貴報辱拝見、然に評の譯申上候處御承知被下、吾師縣主と可被成思召候由辱奉存候、只実名をたに御被下候へは他人の難なく候事故、大慶奉存候、思召之通、四字抜三字御入被下候が可然奉存候、（吾賀茂眞淵○四字御被成候て、吾師縣主は三字に候へとも、つり合能く御入被成候は、能可有之候）、此所はかり御張候て御書可被下

賀茂真淵の国学と著作観

候、為一枚御改書に不及と奉存候、以上、

八日

身分制の中での田安家の学生や弟子での評判を配慮しながら縣主、賀茂真淵という呼称をしていた真淵の心情が吐露されている。

国学の領袖として、みずからまことに相応しい縣主、賀茂真淵の名前を師として弟子に称していく真淵がいる。

また、浜松市立賀茂真淵記念館蔵の森繁子の長歌の詞書に

あがたぬしの伊勢やまとなどへゆき給ふをおくるとて

とある。宝暦十三年（一七六三）二月から田安宗武の命を受けて、江戸から京、奈良、伊勢への旅への槍道中の出立の長歌詞書に、弟子繁子は縣主と記し、縣主の師への呼名も弟子間に定着してきた証がみえる。面映い槍道中であり、途中で真淵は槍を預けるのである。この旅の縁を得、明和元年（一七六四）に本居宣長の入門も加え、真淵学のさらなる発展への、学問的な昂揚を見せる期である。

真淵が浜町に移り「縣居」と称したのは明和元年七月五日で、心穏やかな日々で最後の執筆や版行に尽力できる住居である。六十八歳の時であった。

「縣主」（縣居書簡補遺の右記の一四、一七の書簡）、「縣居」は浜町の住まいにちなむことであった。

師としての格を意識した真淵だからこそ、拙稿で採り挙げる〈また貸し〉の如き問題をも戒めて、弟子が学問に対して配慮すべき在り方を教えていった。

真淵学の総仕上げをしていった時期、対外的には「縣主（あがたぬし）」の称も伝播し、内的には国学をさらに深化させていくにふさわしい真淵に合致した呼称といえるのではなからうか。

「縣主」と署名された国文学研究資料館蔵真淵書簡は、『にひ学び』の成立の明和二年（一七六五）から、真淵の没年明和六年十月三十日にかけての上限と下限の年を設定しておきたい。『万葉考』巻十は真淵みずからが渾身を込めて注釈していたことは確かであった。『にひまなび』は、『万葉考』序および巻一を基に真淵が伝播をはかりたい内容であった。

折しも最晩年まで『万葉考』『うひまなび』『にひまなび』五意考といった真淵国学の著述を大成していく期と重なる。

三

加藤宇万伎の栗田土満に当てた書簡がある。中村幸彦著『賢愚同袋』に紹介されている（『中村幸彦著述集 第十二巻』中央公論社）。その解説中に、

掛川宿の鈴木清左衛門へ文中の趣に従って出した書状は十一月五日の日付で、『県居書簡統編』四〇に収められる。ただしこの編者は「悴名を改次郎左衛門と申候、首尾能去年は加増も被下式百表に相成云々」に基き注して、養子定雄が出仕の宝暦十一年、その翌十二年の状と推定されたが、内容と前掲の書の一致は、明和四年のものなのに疑いはなく、かえって、誠に読点を加えた如くよんで、宝暦十一年に出仕した定雄が、この状の前年明和三年加増二百石になったと考えるべきである。加藤大助は県門の先輩美樹で、この年四十七歳、漬松茸は、この春江戸下り以来、何かと教導された土満が御礼のしるしであろう。美樹からの礼状は、

預貴簡忝拝見、先以御帰郷已來無御恙被成御勤候段、珍重仕候。段々入御念候、御紙上御丁寧之至り、殊ニ何寄之品、御恵投被下誠珍味不浅忝賞味仕候。夏中も預御示候處、其砌より手前ニ大病人有之候而甚取込罷在候。其上月番用ニ付一向不得手透、乍存御無音仕候。其段御用捨可被下候。且秋扇方、御一封被遣則御書物返進いたしくれ候様、申越候條御届申候。是も當夏中より大病誠ニ命ひろひやう此二三日步行仕候仕合ニ御座候。右ニ付書物者先達而私方迄差越置候間御届申候。後萬々便ニ可得御意候。當時も取込候中不取敢。早々。

乱筆御用捨可被下候。恐惶謹言。

十月二十七日

加藤大助美樹（花押）

栗田求馬様

尚々追而寒氣節折角御凌可被成候。くれぐれ

思召ニ付、何寄之名産被賜下、千萬忝奉存候。尚

期後音之時候 以上

とある。

中村幸彦氏は書中の「御書物」は『うひ学び』であろうとし、宇万伎から土満へは届けるつもりであったが、次の書簡によって、届けられなかったとしている。

そして、次の紹介も続いてなされた。

その間の事情は別紙に記した美樹の追而書が説明する。

追而「にひまなび」一冊返進御届申候段、認候處よ

ほどかさ高ニ御座候。少くたゝみ候而も殊外もめ

候間此便ニは進不申候。御届申候心當も御座候

はゞ其段可被仰越候。右之方迄御達可申候。

濱町よりもかさ高ニ而被遣がたき由ニ御座候。依之

書状斗別便進申候

う万伎

當時のことゆえ書物の送付には高が高く、小さくたたみこむのも大変であったようだ。

書簡の年に関して、真淵書簡の年号に特定には手を焼き、いまだに疑いのままのものも存する。本章の宇万伎の土満宛書簡を「明和四年」とされている。

ところが、賀茂真杜氏による考証「平三郎の仕官を報ずる書簡の年代について」（会報二十一、平成四年二月、『賀茂真淵全集第二十三巻』）により、「明和

二年」と近年、見直しがなされた。

真淵は悴の改次郎左衛門とすることおよび二百表の加増に関して、真淵から岡部次郎兵衛宛書簡では「当八月十八日に被召候て御近習番本役被仰付、高二百表被下候旨被仰渡候」とあって明和二年のことという（賀茂真杜）。

また、真淵から梅谷市左衛門宛書簡では「平三郎事、八月十八日に被召候て御近習番本役に被仰付、向後二百表被下候との御事、千万難有奉存候」明和二年某月日とされている（賀茂真杜）。

悴の出世に安堵した真淵の姿が窺える。

折りしも、真淵が『うひまなび』を著述した時期に合致し、国学研究の到達と悴の件との二重の喜びを得た真淵ではなかったか、と思われる。

本章の冒頭に引用した中村幸彦氏引用箇所の前にくる書簡がある。『賀茂真淵全集 第二十三巻』の四〇番書簡、真淵から鈴木清左衛門宛である。ここには、年号を明和三年とされた。

平成四年正月に全集が出版され、同じこの本に挟みこまれた会報がある。会報は二ヶ月後の同年二月の刊記をもつ。

全集では明和三年、二ヶ月後の会報には明和二年と改められているのである。宇万伎への上田秋成入門が問題になるだけに、何年のことかということは重要だ。

江戸時代も、書簡に年号を記す習慣がなかったゆえ、搦め手で年号を特定する方法を取らざるを得ない。

真淵研究に限らないのであるが、年号の問題が揺れを生じさせている。真淵を中心に、多くの弟子、縁者などの資料を可能な限り収集し、モザイクをはめ込むように年号を特定できないかと苦慮しながら調査をおこなうものである。

四

『にひまなび』をめぐって、真淵と弟子になった栗田土満との間の書簡のやりとりがある。真淵は栗田土満宛の書簡で次のようにいう。

七五 五月一九日栗田土満宛書簡 明和五年

賀茂真淵の国学と著作観

此度加藤大助殿便に先書認候中、又御状到来、弥御清福歎喜之御事也、先者御状も相届候也、とかくに麻布などよりは甚遠く候へは遅滞かち也、

一、初まなひ・にひまなひ此度遣候事、先書に申せり、但に

ひ学は旁へかし候て、いまたかへらす候て、さてく延引きのとき故、此方の本を添て遣候、かくては書牀はわるけれども、其許にて御改書被成候〇頼入候、御改書の後、此本もはや返しに不及候、

（略）

皇国の古事千万なるをおきて、他國の事を用んやは、此事

田安中納言（割注、今十五日中納言に任給へり）の御膳にもしか被仰し也、

注

田安宗武卿の任官、明和五年五月一五日 従三位、権中納言。五五歳没。

加藤大助は二條御番として上京。

土満が真淵に入門したのは、明和四年である。

当真淵の土満へ宛てた書簡中、残念ながら、この冒頭に記す加藤大助（宇万伎）からの真淵への手紙は現存していない。宇万伎が元気に遠隔地で過ごしていることを知らせている手紙である。宇万伎から遅滞がちの理由を土満にしらせてやる師真淵がいる。この時の宇万伎から真淵宛書簡が現存していればなんらかのかたちで『にひ学び』のことも知れたかもしれない。やりとりの片方がない現状ではそれは知ることはできず残念である。

宇万伎が『にひ学び』を旁へ貸したという。その旁は誰なのか、不明である。その本はまだ返却されていない。土満は真淵弟子になっているゆえ、宇万伎の弟子ではないから、問題の真淵書簡の謎の人物に土満は当たらない。

真淵は土満には書体は悪いが、こちらの本を気の毒に思うゆえ送るという。真淵はこの本は返さなくてよいとまで書き足している。

国文学資料館蔵真淵書簡で記したとき、宇万伎が弟子に師の著『にひ学び』をへまた貸ししていった事情が発生していた。が、真淵は栗田土満へはわざわざ

ざ、こちらの書体の悪い写し本を返さなくてよいと贈呈しているのである。

『にひ学び』は著述後、国学の根本をやさしく説いたものとして弟子の間に伝播されている。

ちなみに、『にひ学び』は明和二年（一七六五）に記されて、写本でかなり伝播する。一例として、本居宣長の長男春庭が十三歳の時に写した『にひまなび』が写本として存する。宣長がその写本の題簽を記した本が本居宣長記念館にある。このように国学を学ぶ上で、なにをどのように学んでいくかを書写しながら学んでいくのである。『万葉考』の序文の内容をかみくだいた初心者への必須本と考えられる。

板本として刊行されればさらに広く読まれることになる。伊勢神宮内宮の神官であった荒木田久老は『にひ学び』の刊行に踏み切る。序文には寛政十年（一七九八）三月十五日とある。

版本の序文に

物皆は新しき善しといへるを學びの道こそ古りぬる善きとて、吾が師加茂の大人の教へさとし給へる書の卷々多かるが中ににひまなびといふ一綴の有なるを難波人の世に廣くなし置きねと催さるゝによりて、此度板に彫らしむる事にはなりたり。まことや、この學のみ盛りに榮えて、是ればかりの物すら人皆の持てはやせる事となりぬるは、喜ばしく嬉しくて、咲く花の愛での盛りと古言は開け満ちぬよ時の行ければ

寛政十年やよひもちのころ

從四位下荒木田神主久老

と賀茂真淵の学びの道を版本にすることを薦めたのは難波人の言葉によってだという。江戸の真淵学を上方で学びたいという難波人、出版に尽力する伊勢の神官らによって徐々に拡大をみせる国学の伝播への動機づけには目を見張るものがある。

五

真淵国学を考える場合、弟子になったものの疎外感のある建部綾足も鍵を握る人物といえる。

綾足は賀茂真淵、加藤宇万伎、上田秋成などと接触のあった人であり、綾足側からの資料から、拾い出してみる。

綾足は真淵が出仕していた徳川吉宗の第二子田安宗武との交流が真淵に入門する前からあった。それは書簡「（二一）宝暦七年九月六日、断簡」（『建部綾足全集 第九卷』国書刊行會）に記述がみえる。

（前欠）今日田安へ罷出候間、御尋下候処残念、此間申上候通大風流に候。何とぞ終日とまりがけに、御出可被成候。（後略）

どのような理由で田安家へ出かけたのかは不明であるが、綾足は田安家へ罷り出ることを許された関係にあったことを窺わせる書簡である。出自が弘前藩家老武士の出、のち兄嫁との不義ゆえ出奔することになったが、母とのとりなしゆえ江戸で会い居を構える。すでに絵画、俳諧の分野において活躍していた人物である。

田安家からの要望か、誰かの口ききがあつて出入りが可能になったのか、詳細は不明である。真淵とは別筋から綾足が田安家へ罷り出、真淵の姓の岡部を「岡辺」と間違つて記すなどということからすれば、綾足にとって真淵の存在は特別視するには値いしないのか、その大きさを知らなかったのかどちらかであろう。このような綾足の学問認識、風合いの違いが後に真淵を怒らせる因となつていったのかもしれない。決定的にいえることは、この時点で国学への認識はいまだ有していなかった人物といつてよいのではないかと考えられる。

真淵の高弟宇万伎が自宅裏へ引越してきたと記す書簡がある。

「（一七二）宝暦十三年秋頃、断簡」（『建部綾足全集 第九卷』国書刊行會）に次のようにみえる。

（前欠）田安公の御和学者岡辺衛士殿の高弟美樹主野亭の裏の明家へ移り申され候て、万葉集と伊勢物語講釈はじまり候。聴衆多く候。此節御上り

被成候へばと奉存候御事に候。野子も、和学右の岡辺先生へ入門仕候。大儀を存立候間、容易の事にあらず候。(後欠)

綾足は宇万伎が自宅の裏の空地へ引越してきて、『万葉集』と『伊勢物語』の講釈を始めたという。講釈との捉え方ゆえ、国学の注釈という学問とはかけ離れた感覚であったことは確かであることがわかる。それにしても当時の一般認識として、国学の認識は低い認識であったと推察する。儒学が聖堂を構え堂々と武家社会での学問を奨励していたことからすれば、綾足認識からも窺えるごとく新進の国学が世にまだまだ地歩を得ていない学問であったともみえる。

しかし、綾足は宇万伎と近所のよしみを得て、認識としては和学者の岡部衛士殿すなわち真淵へ入門を果たす。綾足の記録は『縣居門人録』に「宝暦十三年九月 建涼岱(綾足)」と入門が記される。この時には、真淵は先述したごとく、すでに「縣主」と側近の弟子からは呼ばれ、縣居にて国学の領袖として意識高く国学に邁進していた大人(うし、先生の意)であった。

軽い感覚でいる綾足からすれば、入門といったことも気軽な気持ちから流行を追うごときつもりで入門したのかもしれない。綾足自身、入門が大儀を立て容易な事ではなかったといっているわけであることからして、そのように考えられる。

ここで綾足の「此節御上り被成候へばと奉存候御事に候」とはどのようなことであろうか。一考として「御上り」が京・大坂への上京を奨めたものではなく、すでに綾足は都の京・大坂を往来し、上方にこそ国学の研究対象とした古典文学を生み、それを享受する人々も多いことを宇万伎に語ることもあったのではないかと推察する。

綾足が真淵入門を果たす同年の初秋数ヶ月前の書簡に、宇万伎が講師で古典の会読を綾足の家で始めたという興味深い書簡がある(「六五 (宝暦十三年七月、断簡)」(『建部綾足全集 第九卷』国書刊行會))。綾足の当時の状況を知る手掛りとして全文を挙げておく。

拝見、未残暑□御清安珍重奉存候。扱々いそがしく罷在候。貴集も、東起折角出勢、最早四五句に成候。又々説もふやし、問答もふへ申候。面白き集に成候。草稿は反古の様に成候条、遣し候てもよめかね候半。新たに書

賀茂真淵の国学と著作観

せ候も費な事と存候。やがて出版は、明題と違ひ間もなく条候、夫迄御待に成候様にと奉存候。(中欠) 松本の集も相とゞき候が、是はみじかき物に御座候。野子紀行と貴集は、よほど長き者に御座候。(中欠) いやはやいやはや、此節命かぎりいそがしく居候。近日、万葉集・伊勢物がたり会読、於野亭はじまり申候。講師は、和学者参(後欠)

綾足は『片歌二夜問答』、『片歌草のはり道』を出版し多忙であった。宇万伎も綾足もわが国の文学の再発見や新規になにかを生み出そうと燃えていることが窺える。この書簡の最末尾の万葉集や伊勢物語の会読講師は宇万伎であったようだ。綾足と宇万伎は距離の近さを感じさせる間柄であったと認められる。

『縣居門人録』によれば、綾足は「宝暦十三年九月 建涼岱(綾足)」と真淵入門を果たしている。

しかしながらここで、意外にも綾足の権威を全く無視した、有名な書簡を挙げよう。真淵が綾足をけなして弟子に送りつけた書簡である。一端綾足は真淵に入門を果たしていたわけだが、真淵の書簡に記された綾足は門人としてどころか、嘘つきよばかりされたひどいものである。真淵は後世のわれわれが読むことを想定したとも思えないが、権威者ゆえの記録資料として、綾足の業績が消されてしまう負の面も生じることは確かである。

真淵が蓬萊雅樂に宛てた、明和六年七月四日附けの書簡である。上記引用の綾足側資料と齟齬がみえる。それにしても、真淵の綾足批判は手厳しい(『賀茂真淵全集 第二十三卷』續群書類従完成會)。

(前略)

○綾足といふもの、仰の如く今時のはいかい・發句てふものをせしものにて侍り、此者從來虚談のみにて交りかたし、されども己か門人に宇万伎といふ人の近所に借宅して、こゝかしこ聞そこなひしを、片歌とやらんをいひなんとて、京へのぼりつとか承候、必ず御交は有まじき也、谷川氏をも問いしとや、さこそ此ぬしは一言にてさとられ候はんと存候、此府にても、今一人随人影といふもの、是は土左殿の驅使のものなるを、志有とて谷丹四郎が頼し故、數年書會なとへも連らせ候て、己か先年未練の説を多く聞しものなるを、遂に土左を亡失せし故、町役所へも屈有之、もはや故郷

へ不得歸候へは、老母再會もかなはず、旁忠孝にかけ候故、此方をも斷侍り、然るを猶こゝかしこに居候て、存の外世間虚談をして、さまゝ板彫なども爲と聞ゆ、かゝる類多く候て、もし野説又は野子か意など思ふ人も有べく苦しみ侍り、其外にも松坂より出しものにさる類も有とか、（是は尾張屋太右衛門とか申者也、是も少はおのれが説を傳聞し也、）もし右の類のものを参るとも、御面話なき様にいたしたく候、此よし谷川翁へも御傳へ給らんかし、右のものとも哥はいまだ調はず侍るに、古風などいひ騒を世には知ものなければ、さても在ことゝ思ふらんや、己は元來不才故、三十年學て漸六句を過候て、凡意を得しに、猶不足のみ多し、その己等よりも猶劣れるもの、いまだ六句にも不至して何事をかいはんや、皇朝の學は千年以來斷しを今好みぬれと、とかく百歳を賜らでは大半にも行べからぬ事也、勢力有ほどの齡にてせし事は、多くは非のみ也、己か書しもの多く世に散てあるこそ、はづかしけれ、其好むかたに引れて、非をも是と思ふは、わかきほどの事のみ、（後略）

真淵はこの三ヶ月後に逝く。学問への厳格な思いが真淵をして語らせ、口を突いて出てきた心情の吐露とみえる。重みのある言葉は一人雅樂のみに語ったものではなく、弟子に行渡らせたい在り方であったかもしれない。百歳を生きたところで到達し難い学問の前に小さく恥じる真淵の姿が浮ぶ。真淵は全く綾足を警戒し信用していない。が、実態が詳らかにされておらず、自分の主家の田安家へ綾足が罷る自由さや伝統から外れた片歌を唱えることも含め胡散臭い学問と、許せないものを感じていたようだ。

綾足は江戸から京・大坂へ勤番となった宇万伎と大坂の上田秋成との架け橋をしたのではないか、といわれる。秋成側の資料『膽大小心録』（異文二）の中に綾足が次の如く記される。

契沖の著書をかいあつめて、物しりになろうと思ふたれと、とかくうたかひのつく事多くて、道はかいかなんを、江戸の宇万伎といふ人の城番にお上りて、あやたりか引合して、弟子になりて、古字と云事の道かひらける。はしめはあや足か、教よ、といふについて学んたれと、とんと漢字のよめぬわろて、物とふたひに、口もしゝとして、其後にいふは、幸い御城内

へ宇万伎といふ人か来てゐる、是を師にして、といふたか、縁しやあつた。江戸人なれば、七年かあいた文通て物とふ中に、五十そこらて京の城番に上つてお死にやつたのちは、よん所なしの独学の遊びのみて、目かあいたと思ふ。

秋成も真淵同様、綾足についてよく言わない。古学で道を開くためには、究めた師につくことが求められ、綾足では齒が立たず埒が明かなかったことを秋成の前で現してしまうことになったのだろうか。秋成は漢字が読めないことをなっているわけで、綾足は並みの日本語としての漢字ならば書簡等をも十分習熟している。これはただわれわれが使う漢字のこととは思えないふしがある。

秋成自身、漢籍を深く読んでおり、其のあたりの専門的知識を綾足に要求したのかもしれない。中国の漢籍を読みこなしていなければ、傑作『雨月物語』は生まれなかったのである。その構成の大きな枠組みや、登場人物の心理的表現は中国漢籍が基となっているからである。

宇万伎との縁を得たことの喜びは大きかったであろう。なぜならば秋成は宇万伎のみを生涯師として遇しているからである。

秋成は『膽大小心録』で文人たちの悪口雑言をはいてきた。この場合、かならずそれなりに事を成した人物が悪く記述されており、名もないごく一般の庶民へは慈愛の目で描写されてきている。それからすると、綾足も文人として秋成の内心ではそれなりに成してきた人物として、よく遇されている人物であるともいえる。なによりも師宇万伎の紹介者としての恩義は生涯にわたり深く感じていたであろうと推察し得る。

六

真淵に完膚なきまでに批判され、こきおろされた綾足であるが、本人は知ってか知らずか、江戸を中心に実に幅広く長崎も含め飛び回り俳諧、片歌を中心に活躍し、さらには国学を講じることまでして、学問文化への伝播に努めている。

綾足が上方を訪れたのはざっと見ても次の如くである。

元文四年（一七三九）に大坂。二十一歳

延享二年（一七四五）に京都。二十七歳

宝暦元年（一七五一）大坂・京へ。三十三歳

明和四年（一七六七）上京、国学講ず。四十九歳

明和六年（一七六九）大坂。五十一歳

明和八年（一七七二）上京。五十三歳

ところで、真淵の齋藤右近宛書簡に宇万伎のことが記述される。明和四年「正月五」（浜松市立賀茂真淵記念館蔵の原本には日付けの五のあとの「日」はない。）の日付けとされている。賀茂真淵全集続群書類従完成会本では、原本と少し異動が存し、揺れがみえる。

尚々書きの次の文章に注目してみよう。既章の第三で真淵の悴「平三郎」について注目してきた。

兩所へ之返書御届可被下候、平三郎加増により、去暮なと安心いたし賄い候、御悦可被下候、久々拙者共にこまり候を、數年にて安心に及び候、河津宇万伎、大番與力かぶを求め候て、旧冬おしつめ淺草新堀へ引こし候、是も大慶いたし候、よきかぶにて本高二百表、地方故に三百表餘に成候と申候、三（筆者注「三」と翻字されているが、原本は「三」には見えない。同文中、他の箇所に「三」の字があるので比較するが、字体がことなる。「之」とも読める。考慮の余地あり保留としておきたい。）年に一度京か大坂へのほり候也、

この書簡でも、平三郎と真淵は記している。真淵は明和三年十一月五日、鈴木清左衛門宛書簡では悴の名を改め平三郎から、次郎左衛門に変えたと記す。尚々書簡所での内容は明和二年のことである。ここで注目したいのは、「去冬に宇万伎は与力株を得て淺草新堀への引越しを終わっていた」という。

高弟の宇万伎の生活について悴の如く心配する真淵がいる。弟子の中でも宇万伎には自分の家族のごとく接して気にかけている。

賀茂真淵の国学と著作観

宇万伎が上方、京と大坂において勤番につく。宇万伎が真淵の本を貸す某なる人物は誰なのだろうか。

真淵が知らない弟子とは誰だろうか。江戸の弟子、遠州地域や上方での関わる人物を消去していくと現時点では的確な人物にいきあたらない。

そこで頭に浮かぶのは宇万伎の弟子といえ、上田秋成が浮ぶ。しかし、年号も一切なく、いつどこでだれがどのようになにをしたか、ということがよぎる。

綾足の上方への足跡は右に挙げたごとくほぼ三十年間にわたり、往来している。宇万伎は綾足とは懇意だったはずゆえ、上方の情報も宇万伎はかなり得ていたのではなからうか。

宝暦九年（一七五九）に宇万伎は浪花に赴き、『岐岨日記』を記している。また、戦場の秀詠がある。

真淵が縣主、縣居という呼称を弟子に行渡らせる交、宇万伎は中年の働きざかりに国学に勤しみ、多忙な勤務に明け暮れたと推察できる。

明和五年浪花在番での事件に縁坐するもいくほどもなく許される。

また、突発的なことが起って危急に対処することを要求されることも出てくる。

江戸と上方への往来はかなり心身ともに負担を強いられたと推察される。

以手紙申上候先以御案内被成御揃候而、御安全

被成御座候旨、珍重ニ奉存候。然者、此度堀大膳亮

殿道中ニ而御死去ニ附急ニ代御番被仰附當二十日比出

立仕候。右ニ附先達而被仰聞候御書物幸之事故、

問屋迄御届申候。若上方へ御出も被成候はゞ

あの方可得貴意候。來三月迄は京都ニ罷在候。

右ニ附甚取込早々如此ニ御座候 以上

右記書簡中の「堀大膳亮」が道中で没したことに伴い、宇万伎は京都への出立を急ぐことと、來年三月まで上方へ逗留する予定とし、土満に来ることあればと誘いを記するのである。

堀大膳亮は堀椎谷家の人物で宝暦五（一七五二）に相続、將軍家初見、從五位下出雲守大膳亮直著二十一歳、さらに二十八歳で七番組大番頭、明和五年（一七六八）三十八歳卒す。

宇万伎は書簡中、明和五年（一七六六）、来年三月まで京都に滞在するといふ。このような事態への対処にも積極的に動いたのであろう。

宇万伎弟子が誰であったか、不明で某とするか、あるいはその内の一人には上田秋成が強力に挙がる。江戸時代の習慣としての弟子入りの場合、綾足は「大儀」と記していたが、束脩や格を重んじる儀式が存した。真淵は宣長との一対面で弟子とすることを決定し、あとは書簡で学問のやり取りを宣長とは行ったことは有名である。師の薦めを受けて三十四年間をかけて『古事記傳』を完成させたのである。

四縣門の一人の高弟としての宇万伎から、真淵は宇万伎の弟子が誰なのか、一切聞かなかったのであろうか。自分の知らない人物と書いていた。不思議な感じがする。明和六年真淵が没するまでに秋成の名前が宇万伎から漏らされることがなかったのだろうか。

あるいは、第二章の国文学研究資料館蔵真淵書簡に、宇万伎弟子であり真淵自身は知らない、と記しつつ、本を集めているようなことを書いているところからして、真淵は内心無視できる人物ではないと直感的に考えたのかもしれない。

推測ながら、真淵が著述をほとんど真淵の承諾なしに宇万伎がその弟子に貸すことには抵抗を感じる人物であったともいえよう。

宇万伎の〈又がし〉の相手は不明で特定できない。新資料の出現により明らかにすれば幸いである。それを期待しつつ、〈又がし〉の相手については擱筆とする。

隔靴搔痒、真淵国学と秋成等弟子との不明点はいまだ多く存する。

宇万伎以外は師とよぶことはなかった秋成ではある。しかし、真淵没後、真淵本や師の宇万伎の本を出版し、その国学を系譜として繋いでいった。〈又がしの又がし〉であってもよい。秋成の学問には真淵の色濃い影響が宇万伎以上にみられる。

秋成は学問上の、私淑した真淵の孫弟子といえる。宇万伎は秋成にとってたった一人の師であり京で逝った師を懇ろにしたのである。秋成は国学者として、

さらにその知識を生かして読本作家として普遍性を備えた思想性の高い稀有な作品を残した。二〇〇九年（平成二十一）は秋成の没後二百年記念が準備される。

国学の領袖真淵、宇万伎の系譜に連なる秋成を顕彰し後代に伝えていきたい。

附記

国文学研究資料館蔵「卷子本二軸『和学者書簡集』」は近世和歌研究会において、新輪読資料とされており。

巻頭書簡「賀茂真淵書簡 青木菅根宛」（年次月日不明）は真淵と弟子宇万伎資料ゆえ、拙稿において使用が許可され発表させていただきしました。

有り難く、謹んで深謝いたします。